「源氏物語絵巻」の現状模写における研究
―「御法」第一～第三紙詞書―

江　彦　穎

目次

序論
　第一節
　第二節
　第三節
第一章：益田家本「源氏物語絵巻」について
第二章：「源氏物語絵巻」の模写について
第三章：「御法」詞書の第一～三紙の現状模写報告
結論
参考文献

序論

絵巻物は巻物の一つで、主に横長の紙を繋いで物語や絵画などを横に長く連続して描いた物である。最初の絵巻物は奈良時代の『過去現在絵因果経』と言われている。今の絵画と詞書が交互に現れる形と違って、『過去現在絵因果経』は上段に絵画、下段に経文の形である。平安時代になると、王朝文学、かな、大和絵と料紙の発展と共に絵巻の制作も最高潮になった益田家本「源氏物語絵巻」とは現在五島美術館に収蔵されている「源氏物語絵巻」を指し、五島本「源氏物語絵巻」とも称する。諸書の比較の結果を自分なりに理解し纏めていきたい。

第一節　研究目的

『源氏物語絵巻』は『源氏物語』を題材にした絵巻である。現存の国宝に指定されている作品はかつて「隆能源氏」と呼ばれていた平安時代末期の物である。まず、題材となる『源氏物語』は平安時代中期に成立した日本が誇る長編物語である。料紙の歴史は奈良時代まで遡れるが、当時は簡単な染紙と金銀箔を撒いた紙しかなかった。平安時代から下絵、雲母摺り、ろう箋、漉き模様などの装飾料紙が現れた。下絵装飾紙とは、料紙に絵を描き込み、絵の上に文字が書写される紙のことである。下絵の文様の意味を調べ、「御法」の大意を理解した上で、下絵の文様と文章内容の関係を分析する。美術の手法で現状模写を行った過程を記録した論文を読み、利点と欠点を指摘し、今回の現状模写作業の参考資料とする。今回の制作は保存用の資料として制作するため、時代背景と保存性に配慮しながら、材料を選び、制作する。制作最後の過程の表装仕立てを機会として、源氏絵巻の保存形態を改めて考える。制作当時の巻子装に戻すか、新たな額装にするか、文化財の役割を考えながら、表装の形式を考える。本論文は以上の研究と作業を通し、王朝美を理解し、書道なりの現状模写の可能性、必要性、各表装形式のメリットとデメリットを論じていく。

第二節　研究方法

まずは文献資料を読み、益田家本「源氏物語絵巻」の概要と流転をその後の研究のために、参考資料として文章にまとめる。次は源氏絵巻の復元模写と現状模写の報告書、文献資料を読み、桜井清香氏による復元模写と「よみがえる源氏物語絵巻全巻復元に挑む」を紹介する。そして、新潟大学教育学科美術科准教授永吉秀司氏の報告書を読み、その中から、自分が注目する美術的な現状模写の過程と手法を文章にまとめる。前の二章の結論を踏まえて、現状模写を行いながら、書道の現状模写に適合する方法と今回の作業中に未解決の部分をまとめる。そして源氏絵巻の保存のために適合する表装形式を考え、自分が思う最善な表装形式を出す。

第三節　先行研究

自分の研究に入る前に、益田家本「源氏物語絵巻」の概要と流転の資料と、現状模写を行う場合の参考資料として、以下の三冊を主な先行研究にした。

一、「五島本「源氏物語絵巻夕霧詞書第一紙第二紙」現状模写―美術の制作手法における一考察―」『新潟大学教育学部研究紀要』第四巻第二号　二〇一一年

二、『よみがえる源氏物語絵巻　全巻復元に挑む』日本放送出版協会　ＮＨＫ名古屋「よみがえる源氏物語絵巻」取材班　二〇〇六年

三、『田中親美：平安朝美の、蘇生に捧げた百年の生涯』名宝刊行会編　展転社　一九八五年

第一章　益田家本「源氏物語絵巻」について

本章は益田家本「源氏物語絵巻」の概要と流転をまとめる。第一節に益田家本源氏絵巻「鈴虫一」、「鈴虫二」、「夕霧」、「御法」の四面の詞書の内容を簡単にまとめる。第二節は明治時代初期阿波蜂須賀家の伝来品から戦後五島慶太氏の収蔵品になる経緯をまとめる。

第二章　『源氏物語絵巻』の模写について

本章は「源氏物語絵巻」の復元模写と現状模写の二種類の模写の資料と報告書を読み、桜井清香氏による復元模写（昭和模写）と「よみがえる源氏物語絵巻全巻復元に挑む」というプロジェクトを紹介する。次に永吉秀司氏の現状模写の報告書を読み、その中で注目した模写手法をまとめ、第三章の参考にする。

第三章　「御法」詞書の第一～三紙の現状模写報告

本章はまず「御法」詞書第一～三紙の現状を考察し、本物と図版の違いをまとめる。その結果を参考にし、『原色本』と『名筆本』の中から、この後の作業に参考になる本物の配色に近い図版を選択する。本物と図版を見て、不明なところを挙げ、実作業に注意すべきところとして挙げる。以上の結果を参考にしながら、実作業に入る。実作業の工程は紙の質から巻子仕立ての作業まで十一の工程に分けられる。巻子制作を終えた後、制作工程で発見した問題、反省点をまとめる。

結論

今回の模写制作を機会として、「源氏物語絵巻」御法の詞書の模写方法、及び書跡文化財の表装について、改めて考えた。「源氏物語絵巻」御法詞書第一～第三紙の模写制作を例として挙げれば、本来の形である巻子装と現状の額装の二つの表装形式にすることで現段階の記録とし、さらに表装形式の違いから時間の経過による銀箔の硫化進度が確認できる参考資料にもなる。美術手法でも詞書の現状模写を行うことができるが、料紙から制作した模写作品の分が本物の詞書の状況に近い。今後の保存・修復に役立つ模写作品になる。しかし、美術手法の工程を全て否定するつもりはなく、裏彩色の手法は料紙の配色の深みと複雑さが表現できるので、今後の模写作品に試す価値がある。今回未解決の問題を今後の課題として、試行錯誤を重ね、書道なりの模写方法を作り、書跡文化財の模写を普及したい。

参考文献

・『「国宝　源氏物語絵巻」展　図録』五島美術館　二〇一〇年
・『日本名筆選』46　源氏物語絵巻　二玄社　二〇〇四年
・小松茂美「源氏物語絵巻の制作年代―詞書の立場から―」『国宝　源氏物語絵巻』（帙入本）』講談社　一九七一年
・山岸徳平校注『日本古典文学大系』17　源氏物語四』岩波書店　一九七四年
・與謝野晶子訳『全訳源氏物語四　角川書店　二〇一一年
・村上翠亭・福田行雄『かな料紙の作り方』二玄社　一九九五年

【作品研究　模刻】「徐三庚の印」

《釈文》

「無事小神仙」、「安且吉兮」（白文）、「花長好月長圓人長寿」、「久盦」、「益寿」（白文）、「世人那得知其故」（白文）、「松左梅右」（白文）、「心在山林」、「媚于庶人」、「写心」（変形）、「**膽欲大而心欲小知欲圓而行欲方**」（白文）、「以恬養知」、「倦遊詞翰」、「**放懐楚水呉山外得意唐詩晋帖間**」、「玉屏山人」、「煙雲供養」、「吉祥長寿」、「静観」（白文）、「羊」（肖像印）、「不足為外人道」（白文）、「惟心造」、「馨」、「花好月圓人寿」、「家在江南第二泉」、「心之所好」、「志不在温飽」、「風流不数杜分司」、「悔公心画」、「一笑」、「匊粼日利」、「雲卿氏」（変形）、「天機清曠」（変形）、「古香」、「江山為助筆縦横」（白文）、「于魚得計」、「窮季弄聿衫襃烏」、「頗知書八分」、「神妙欲到秋豪顛」、「周公不師孔子孔子亦不師周公」（変形）、「桐陰小隠」、「楽民之楽」（朱白相関印）、「惟庚寅吾以降」（白文）、「謹啓」、「日有一泉惟買書」（変形）、「歳華如箭堪驚」、「謙退是保身第一法」、「長楽」（白文）、「松耘」、「**桃華書屋**」（白文）、「曽在沚瀾所」、「**秀水蒲華作英**」等

※特に記載のないものは朱文印

※紙面の都合上、太字の四顆を掲載（いずれも原寸）

《法量》

一二・四×一八・四センチ　二冊

《解説》

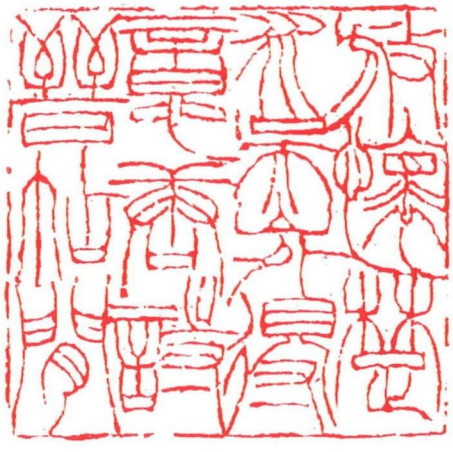
学部生のときから徐三庚の書と篆刻が好きで、卒業作品として、徐三庚の「臨天発神讖碑」を臨書し、徐三庚の印影を模写した。この二年間で、徐三庚の印を模刻することを通して、自分の篆刻力を高めたいので、徐三庚の印の模刻を冊子にし現段階の記録として制作したいと考えた。印の内容は主に吉語、書斎、詩文、姓名と肖像である。徐三庚は多才で、篆刻の他に、書道、絵画、詩文の領域でもとても有名である。徐三庚の印はとても特徴があり、早期は浙派の特徴が濃く伝統的な字形と配字であり、今回の作品の中の「桃華書屋」という白文の印はその代表である。中晩年になると、とても個性的な書風と印風に変化した。徐三庚の印には徐三庚の書風が現れて、今回の作品の中に「惟庚寅吾以降」と「膽欲大而心欲小知欲圓而行欲方」という白文の印と「曽在沚瀾所」という朱文の印の字形は晩年の書作品の字形に似ていて、線の太さが激しく変化し、中心が高く、縦線を長く伸ばし、一文字の上半分に線が詰まって、下の半分に余白ができて、この文字を長く見せようとした。このような印を彫る時に線の起筆、終筆と転折の三箇所に注意した。以上の二種類の印の他に、「倦遊詞翰」という朱文の印と「安且吉兮」という白文を見ると、徐三庚は多くの漢時代と秦時代の印など古代の印を勉強し、この印風は書斎印と姓名印に用いることが多い。印風以外、徐三庚の印の字形にもとても特徴がある。今回の作品の中の「花長好月長圓人長寿」という朱文の印はその特徴とよく示す印である。「花長好月長圓人長寿」は九文字を三列に配字し、中央の列に「長」という文字が横一行に並んで、この状況を避けるために中央の列の「長」は畳点に変えた。「圓」が位置する中央の列は狭いので変形の文字を使用した。以上の特徴を注意しながら模刻した。

【模刻】徐三庚の印

桃華書屋

秀水蒲華作英

膽欲大而心欲小知欲圓而行欲方



放懐楚水呉山外得意唐詩晋帖間

【作品研究　創作】「「源氏物語絵巻」御法詞書の現状模写（第一～第三紙）」

《釈文》

みのり

中宮は、まいりなむとあるを、いま
しばしも御覧ぜよと、きこえま
ほしくおぼせど、さかしきやにも
あり、うちの御つかひのひまなきも、
わづらはしければ、さもえきこえた
まはぬに、あなたにもまいりたまはね
ば、みやぞまいりたまふ。かたはらい
たけれど、げに、えみたてまつらね
さまにて、いとかりそめによをおもひ
たまへる、こゝろぐるしく、すゞろに
ものがなし。かぜのけしき、すごく
ふきいでたるゆぐれに、せざい（中略）
みたまうとて、けうそくによ
りかゝりてゐたまへるを、院わた
りたまひて、「けふは、いとよく、おき
ゐたまへるは。このおまへにて、こよ
なく、おほむこゝちはれ〳〵しきなめり
かし」ときこえたまふ。かばかりの
ひまあるをもいとううれしと、おぼ
ほしたる御けしきを、みたま
ふも、いとこゝろぐるしく、ついに、いか
におぼしさはがむとおもふも、あはれなれば、

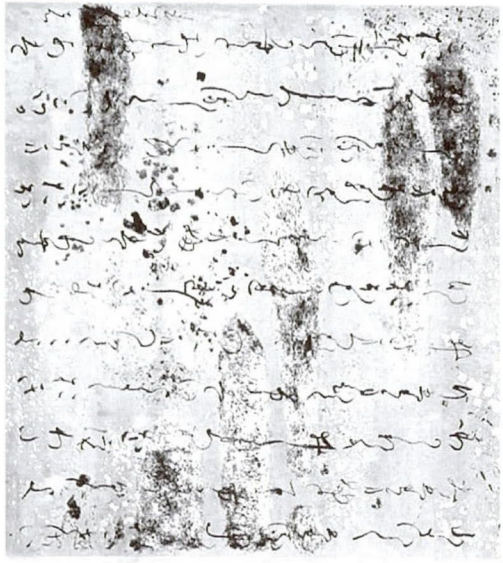
《法量》

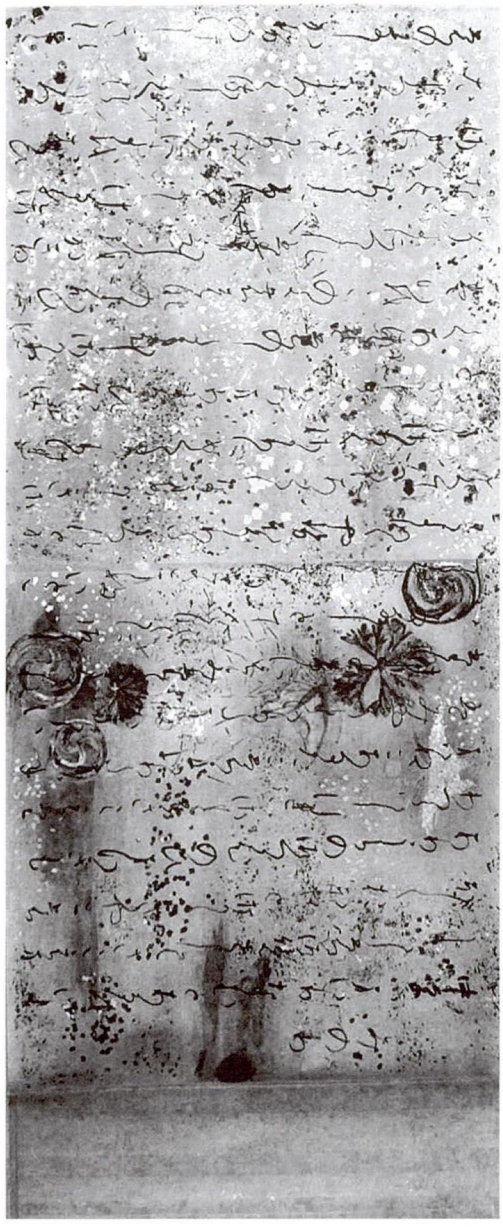
二七・〇×一二八・〇センチ

《解説》

修了論文の研究となる益田家本「源氏物語絵巻」御法詞書第一～三紙の現状模写を実施した。「源氏物語絵巻」の制作年代を考えると、楮紙の打ち紙の可能性が高いので、楮紙の中から薄く通過性がある文化財修復の作業によく使用される一・七匁目の薄美濃紙を選択した。紙の配色については、クヌギ、丁子、矢車と灰汁媒染で染色、古色掛けと色調整を行った。参考資料によれば、本物の紙質は表面が滑らかで繊維がぎっしりとすきなく詰まっている様なので、楮紙を打ち紙にした。染め上がった紙を作った枠に貼り込み、ドーサ引きの作業を行った。コピー用紙で下絵の型を取り、ＣＭＣで紙に貼った。その上にぼかしを掛けた。金銀箔を切箔、野毛、砂子に加工し、染め上がった紙をフノリとニカワの混合液で装飾した。銀を黒く見せるために硫黄末で硫化させた。文字を入れて、最後日本の巻子形式に制作した。巻子仕立ての時に、表紙裂が硬いので、その裏に貼る見返しの紙に肌裏を打つ時に柔らかな画仙紙を使用し、増裏を打たずに表紙を柔らかく制作することに注意した。作業中に使用した材料は作品の保存・修復を考えて、全て可逆性のある自然の物を選択した。最後、空気に晒さない様に仕上がった巻子を楮紙で包み、アーカイバルボードＥで簡易な箱を作って、中に入れた。

もう一点は文化財の保存に適合する表装形式を研究するために、御法詞書第三紙の現状模写を保存額装（ＵＶカットアクリル板を用い、板を本紙に当たらないように間に細い棒を入れた）を制作した。





【創作】源氏物語絵巻「御法詞書の現状模写（第一～第三紙）